



Title	相互行為としてのほめ行動の様相と収束の構造 : 会話分析の手法とフェイスの概念を用いて [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	趙, 文騰
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第15811号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91957
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Zhao_Wenteng_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（ 学術 ）

氏名： 趙 文騰

学位論文題名

相互行為としてのほめ行動の様相と収束の構造

—会話分析の手法とフェイスの概念を用いて—

本研究では、自然発生的な日本語会話と中国語会話を分析データとし、ほめ行動におけるほめられ側とほめ側の発話・振る舞い及びほめ連鎖の収束について分析している。分析にあたっては、会話分析の手法と語用論におけるポライトネス理論のキー概念であるフェイスの概念が用いられた。

本研究が分析対象とするほめとは、親しい間柄においても、初対面のようなそれほど親しくない間柄においても、相手をほめたり相手にほめられたりすることは、日常生活で頻繁に行われる行動である。ほめ行動は、相手に親しみを表したり、その場の雰囲気や和ませたりするという社会的機能を持つだけでなく、話題の開始や転換など、会話の進行においても重要な役割を果たす。しかし、ほめ行動は、ほめ側・ほめられ側両者に複雑な課題をもたらすことが指摘されている。ほめが行われた場合、ほめられ側は、自画自賛の危険を冒しほめをそのまま受け入れるか、それともほめてくれた相手の好意を否定しほめを受け入れないかを選択しなければならない。これは「ほめられ側」のジレンマと呼ばれている。そして、ほめられ側が後者を選択した場合、ほめ側は、さらなるほめを行うか、それともほめを続けることをやめるのかという選択に直面する。これは「ほめ側のジレンマ」である。

従来のほめ研究では、「ほめられ側のジレンマ」に関する分析は数多く行われてきたが、「ほめ側のジレンマ」についてはその存在が指摘されるのみであった。また、従来のほめ研究は、「ほめ」とそれに対する「ほめ返答」の2発話のみを分析対象とするこ

とが多く、まとまりのある一連の談話をデータとして用いる研究は数少なかった。本研究は、ほめ行動を含む一連の談話を分析対象都市、会話分析の手法と語用論におけるフェイスの概念を用いて、ほめられ側・ほめ側が「ほめられ側のジレンマ」および「ほめ側のジレンマ」にどのように対応しているのか、また、このようなジレンマが生じうるほめ行動を含む会話がどのように収束に向かうのかを明らかにすることを目的とする。

著者は、コーパスデータおよび筆者自身が収集した日本語・中国語会話データを、会話分析の手法を用いて書きおこし分析するとともに、その分析結果について、ポライトネス理論およびその重要な分析概念であるフェイスの概念を援用して考察した。その結果、会話参加者の「ほめられ側のジレンマ」および「ほめ側のジレンマ」への対応について以下のことが明らかになった。

まず、「ほめられ側のジレンマ」への対応について、ほめ返答の生起が期待される位置に自己卑下またはユーモアが現れる事例に注目し、自己卑下やユーモアがほめ返答として機能していること、それと同時に、自己卑下はほめられ側の好ましくない特徴を呈示することで、ユーモアは冗談めかすことで暗示的にほめを否定していることを示した。すなわち、これらの行為は、ほめを受け入れ相手に自画自賛と捉えられることを回避すると同時に、ほめを否定しないことで、ほめ側のポジティブ・フェイス（以下、PF）の侵害も避けている。

次に、「ほめ側のジレンマ」への対応について、著者は、ほめが否定されるという事態に直面したほめ側がとる行動のうち、「関連情報の確認」、「ほめる根拠の追加」、「ほめ側の自己卑下」に注目した。これらの行動は共通して、即座にほめを続けないことで、ほめられ側をさらなる「ほめられ側のジレンマ」に直面させることを避けている。また、直接的に再ほめを行わないことで、ほめが続けて否定されるというリスクも回避している。以上の2点に加え、「関連情報の確認」はその後続連鎖に見られる再ほめを自然に行うためのリソースを得ることにつながっていた。また、「ほめる根拠の追加」は直前の否定されたほめを補強していた。最後に、「ほめ側の自己卑下」は自らを押し下げることで、相対的に相手を持ち上げ、間接的なほめとして機能していた。

さらに、著者は、ほめ事例のうち、1度目のほめが受け入れられず連鎖が拡張する事例に注目し、そのようなほめ連鎖を収束に向かわせる手続きについて分析した。その結果、ほめをめぐるやりとりが続く連鎖において、以下の2つの特徴的な行動が観察された。まずは自発話継続である。移行適切場（TRP）に至ったにもかかわらず、現話者が発話を継続し発話順番を相手に取得させないことで、ほめ返答やほめ直しに対するさらなる返答を回避しほめ連鎖をそれ以上展開させない様子が観察された。次に、笑いの共有である。笑いの共有はそれまでの話題の終結と関連しており、笑いの共有の次のターンは新たな話題が導入される適切な場所となる（Holt, 2010）ため、ほめ返答の位置に現れたユーモアに対する笑いの共有はほめ連鎖の収束を可能にする。ただし、すべてのほめ連鎖の収束には明確なほめ連鎖の収束手続きがあるわけではない。上記の手続きがなく

とも収束するほめ連鎖も数多くあり、今後さらなる事例収集と分析が求められる。

本研究には以下の3つの意義があると考えられる。第一に、「ほめられ側のジレンマ」とともに、従来のほめ研究が十分に扱ってこなかった「ほめのジレンマ」を分析し、ほめ行動の理解の促進に貢献したことである。第二に、従来の研究が、「ほめの格下げ」「ほめ対象のシフト」(Pomerantz, 1978)など、ジレンマへの対応として、ほめ行動特有の行動を挙げていたのに対し、本研究は自己卑下やユーモアなど、ほめ以外の会話でも観察される行動によってジレンマへの対応を記述した点が挙げられる。これにより、ほめ行動を含む会話の分析と他の会話の分析を並行的に扱うことが可能になる。最後に、本研究は、会話分析における隣接ペアおよび優先組織という分析概念と、ポライトネス理論におけるフェイスの概念を統合的に用いた分析を提示したため、会話分析とポライトネス理論の理論的発展に貢献することが期待される。